



発行所
一般財団法人
広島県動員学徒等犠牲者の会
事務局
広島市南区比治山本町12-2
広島県社会福祉会館内
〒732-0816 電話 (082) 252-0316
印刷所 Taisei

デジタルブック
“慟哭の証言”
<http://www.douingakuto.com/>

御礼!

理事長 本地 正治

お陰様で今年も「第69回動員学徒等原爆死没者追悼式」を8月6日に挙行することができました。

関係各位様から多大なるご支援を賜りましたこと、ならびに、当会

発足以来、会員の皆様から変わらぬご厚情をいただいておりますこと、心より御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

本号は、この追悼式の模様及び当会の被爆80周年施策として、次の記事を掲載いたしております。戦没者の方々の御霊の慰霊の一助になれば幸いです。

祝 谷本清平和賞受賞 御「基町高創造表現コース」様

広島市立基町高等学校の「創造表現コース」様が、本年の第37回谷本清平和賞を受賞されました。誠にめでとうございます。生徒が聞き取った被爆者の記憶

・「原爆の絵」

広島市立基町高校生が被爆者の証言を基に制作した動員学徒関連の絵の中から15点を抽出して掲載しました。

・「80年前のトラウマ」

当会の役員である渡美津子さんの被爆体験手記です。

・「平和朗読劇観劇の感想文」

今年5月17日に広島で上演された平和朗読劇を観劇された当会の役員の方からお寄せいただいた感想文を匿名で記載しました。

を「原爆の絵」に仕上げるという、2007年からの継続した取り組みが評価され、本年11月16日に贈呈式が行われました。

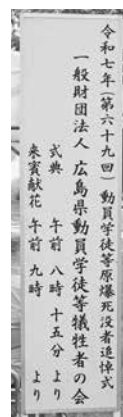
※谷本清平和賞は、被爆の惨状と平和の尊さを訴え続けた故谷本牧師の遺志を継承するために、1987年に創設され、毎年平和に貢献した個人や団体に贈られています。



黙祷



慰霊塔前



案内

第69回原爆死没者追悼式

式次第（敬称略）

黙祷

来賓追悼の辞

広島県知事 湯崎英彦

（代読）健康福祉局 社会援護課長 勝田徹

広島市長 松井一實

（代読）健康福祉局保健部 次長 遠山郁也

学校代表生徒の追悼の辞

広島市立舟入高等学校 生徒代表 渡邊菜月

ご来賓等献花者

（衆議院議員）

岸田文雄 平口 洋 福田 玄

斉藤鉄夫 空本誠喜 寺田 稔

佐藤公治 小林史明 新谷正義

石橋林太郎 小林 晃

野田佳彦 玉木雄一郎

（参議院議員）

森本真治 三上えり 西田英範

越智俊之 谷合正明 原田大二郎

（広島県議会議員）

尾熊良一 山形しのぶ 中原好治

山下智之 鷹廣 純 蔵本 健

山本 茂 瀧本 実 畑石顕司

竹原 哲 灰岡香奈 岡部千鶴

相澤 孝 上野寛治 砂原崇弘

（広島市議会議員）

碓氷芳雄 松本拓也 母谷龍典

宮崎誠克 川口茂博 大西 理

吉田いつこ 平野太祐 定野和広

岡村和明 三宅朗充 山下正寛

西佐古晋平 門田佳子

（広島市遺族会）

副会長 中島百合枝

（広島市立舟入高等学校）

学校長 西 巖弘 教諭 松原由美

式 辞

理事長 本地 正 治

本日ここに、広島県動員学徒等犠牲者の会 第六十九回原爆死没者追悼式を挙行するにあたり、最初に動員学徒 女子挺身隊員として出動中に被爆し犠牲となられた七千有余名の英霊に対し、深甚なる哀悼の誠を捧げるものであります。

80年前の今日、広島市では防火帯をつくるための建物疎開作業に動員された12歳から14歳までの生徒は9千人以上で、そのうち約6300人が原子爆弾投下により犠牲となりました。

また軍需工場などに動員されていた14歳から17歳までの学生約1万4千人以上のうち、約900



理事長 本地正治

人が犠牲となり、合わせて約7200人もの動員学徒の命が奪われました。

被爆しながら生存した動員学徒の方々は80年たった今でも、同胞を亡くした無念さと、自分が生き残ったことの申し訳なさを胸に抱き続け、加えて体に受けた傷病と生涯付きまとう放射線への恐怖と戦い続けておられます。

また、亡くなられた学徒のご遺族の皆様は、今もって幼くして亡くなられた学徒の在りし日が昨日のこのように思い出され、深い哀惜の悲しみは年月が経ったからと言って、決して癒えるものではないと推察いたします。

昨年12月に日本被団協がノーベル平和賞を受賞されましたことは、被爆関係者の皆さまにとりまして大きな朗報でございました。

この受賞は被爆関係者の皆さまが原爆による心身の痛みや無念さを、核なき世界平和を願う力に変えて、被爆の実相と原爆の非人道性を、長年にわたって地道に訴え続けてこられたご努力の成果であり、誠にご同慶の至りでございます。

しかしながら、被爆者は昨年度末に10万人を下回り、平均年齢は86歳を超えています。このことは、

原爆の悲惨さを実体験として語ることができる世界で唯一の証言者の減少を意味し、被爆の記憶・実態が風化し、核なき平和を訴える活動母体の弱体化が懸念されるところでございます。

このように被爆者の減少と高齢化が進む中、最近では高校生世代を中心に、若人たちが戦争や核兵器について自ら進んで学習し、国際的な視野に立ち、核なき世界平和を願って、いろいろな活動をしてきています。

広島市内の高校生で例えれば、一 広島平和記念資料館来館者に、展示物や公園内の慰霊碑などの解説を行う、ピースボランティア。

二 被爆者の体験や平和への思いを語り継ぐ、被爆体験伝承者。

三 「ヒロシマ・ナガサキ ピースメッセンジャー」として、核廃絶と世界平和の実現を、国連等で訴える、高校生平和大使。

四 原爆被害の実相を視覚的に後世に伝えていくために、被爆者とともに作成する、「原爆の絵」の作成者。

など、枚挙にいとまがないほどの活躍ぶりです。

第二次世界大戦で動員され、犠牲となった学徒と同じ年代の若者たちの、懸命に平和活動に携わる姿に、これから80年先には私たちの究極の願いである核なき世界平

和が必ず実現されているものと、大いに期待をいたしているところでございます。

当会といたしましても、80年たちました今日、心を新たにし、原爆による戦没学徒の無念さを忘れず、これからも、月二回の慰霊塔への供花。周辺の清掃。また月一回の西向寺における読経を継続実施し、英霊の慰霊及び慰霊塔の護持に努めてまいりますとともに、微力ではございますが、「核なき平和な世界の実現」に向けて、原爆の悲惨さと平和の尊さを、可能な限り、あらゆる場において語り継いでまいりたいと、これまで以上に意を強くいたしておるところでございます。

終わりに、大変暑い中、早朝より本日の式典にご参列いただきました皆様に、心より厚く御礼申し上げますとともに、動員学徒の御霊の永遠の安らぎと、ご参列の皆様様の平安を心からお祈り申し上げます。式辞といたします。



追悼のことば

広島県知事

湯 崎 英 彦

本日ここに「第六十九回原爆死没者追悼式」が執り行われるに当たり県民を代表し、謹んで追悼のことばを申し上げます

顧みますと、あの忘れることのできない日から、八十年という歳月が過ぎ去りました

人類史上初めて使用された原子爆弾は、この慰霊塔の上空で炸裂し、未来を信じ、懸命に生きる動員学徒や女子挺身隊の方々を始め、十数万の生命が一瞬にして失われ、街も廃墟と化しました

祖国の発展と安泰を願い、建物疎開などに従事中に亡くなられた余りにも若い犠牲者の方々の無念の思いを推しはかるとき、今なお哀惜の念が、胸に迫るのを禁じ得ません

また、かけがえのない家族を失われ、決して癒されることのない深い悲しみを胸に、幾多の困難を乗り越えて、こられました御遺族の皆様に対し、心からの敬意を表します

なお、世界に目を向ければ、今なお武力紛争や、残虐なテロ行為

などにより、罪のない、多くの人々が、戦渦に巻き込まれ、尊い命を失っているという、厳しい現実があります

この式典に当たり、私たちは戦争の悲惨さや、そこに幾多の尊い犠牲があったことを、次の世代に語り継ぎ、二度と戦争の悲劇が繰り返されることのないよう、世界恒久平和の実現に向け、平和の大切さを、国の内外に発信し、続けていくことを、誓います

また、誰もが誇りと愛着を持ち、広島に生まれ、育ち、住み、働いて良かったと、心から思える広島県づくりに、全力を尽くしてまいります

終わりに、犠牲者の方々の御冥福と、御遺族の皆様の方々の御平安と、御健勝を、心からお祈り申し上げて、追悼のことばといたします



広島市長

松 井 一 實

本日、一般財団法人広島県動員学徒等犠牲者の会の主催により、第69回動員学徒等原爆死没者追悼式が執り行われるに当たり、犠牲者の御霊に対し、謹んで追悼の言葉を捧げます。

80年前、動員学徒、女子挺身隊員として、ひたすら我が国の安泰を願い、軍需工場での作業や建物疎開作業に従事されていた多くの方々が、一発の原子爆弾によって若くしてその尊い生命を奪い去られたことは、誠に哀惜の念に堪えません。また、最愛の肉親を亡くされた御遺族の皆様におかれましては、今なお、その悲しみはいかばかりかと御拝察申し上げます。

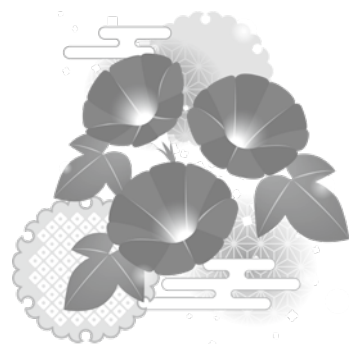
今日の我が国の平和と繁栄は、こうした多くの尊い犠牲の下にあります。私たちはこのことを決して忘れてはならず、同じ思いをするこどもたちやその家族を生み出さないためにも、二度と悲惨な戦争を繰り返してはなりません。

ロシアによるウクライナ侵攻の長期化や中東情勢の悪化といった、厳しい世界情勢により、国家間の疑心暗鬼はますます深まっています。他国より優位に立ち続けるための核戦力を含む軍拡競争が続く、世論においても武力に頼らざるを得ないという考えが強まっていけば、平和な世界の実現は遠くばかりです。

こうした中で、昨年度、広島平和記念資料館に世界中から過去最多となる226万人を越える人々が訪れました。これは、かつてないほど、被爆地広島への関心、平和への意識が高まっている証とも言えます。

本市としては、世界の約8,500の平和首長会議の加盟都市と共に市民社会の平和意識の醸成に一層取り組み、「平和文化」に満ちた世界を創ることで、核抑止力に依存する為政者に、対話による平和的解決に向けた外交政策への転換を促していきます。

終わりに、御霊のとしえに安らかなる御冥福をお祈り申し上げますとともに、御遺族の皆様への御健勝を祈念いたしまして、追悼の言葉とさせていただきます。



広島市立舟入高等学校

生徒代表 渡 邊 菜 月

本日は、一般財団法人広島県動員学徒等犠牲者の会主催の第六十九回原爆死没者追悼式に参列させていただけますことに感謝し、謹んで追悼の言葉を申し上げます。

八十年前の八月六日、一発の原子爆弾が広島島の街に投下されました。その日、雲一つない青空の下で始まった何気ない日常が、一瞬にして奪われたのです。多くの尊い命と、未来を思い描いていた若者たちの夢、日々の暮らしや希望が、一発の爆弾によって消し去られました。

あの日から時は流れ、広島

は見事に復興しました。緑豊かな街並みと笑顔あふれる人々の姿は、先人たちのためまぬ努力の証です。しかし、私たちが生きるこの世界は、いまだ核の脅威から解放されていません。

昨年、核兵器廃絶を長年訴え続けてきた日本被団協が、ノーベル平和賞を受賞しました。被爆の実相を伝え続けてこられた方々の努力が、世界から評価されたことは、大きな希望です。そして同時に、私たちの世代がその願いを受け継ぎ、次の未来へ繋げていく責任の重さを、改めて感じています。

一方で、世界を見渡すと、核兵器が再び現実のものとして語られる危険な状況が続いています。中東・イラン情勢の緊迫化や、各国の軍拡競争のなかで、「核の使用」が可能性として報じられるたび、私たちは不安を感じずにはいられません。

生徒代表 渡邊菜月さん

核は決して抑止力ではありません。存在するだけで多くの命を脅かすものです。広島

現在使うことができる現役核弾頭の数が増えていきます。いつ使われるか分からない核兵器が九千個以上もあるという事が、私は怖くてたまりません。私たちはもう、核兵器による悲劇を、これ以上誰にも経験させてはなりません。それは国や宗教、立場に関係なく、全ての人が願っているはずで

戦時中、私たちと同じくらいの年齢の学徒たちは、勉強する時間も奪われ、毎日必死に働きながらも、きつと平和な未来を信じていたと思います。でも、その未来は原爆によって一瞬にして奪われてしまいました。そのことを思うと、とても言葉にはできない悔しさが込み上げてきます。

現在、被爆者の方々の平均年齢は八十五歳を超えています。直接お話を聞ける時間は、もう多くは残されていません。被爆者のいない時代が迫っている今だからこそ、私たち若い世代を含め多くの人が、戦争の悲惨さを語り継ぎ、世界に向けて核兵器のない世界を訴え続けていかななくてはなりません。

今日という日を迎えることができたことに感謝し、原子爆弾により命を奪われた方々のご冥福をお祈りいたします。そして、過去から学び、平和な未来を築くために歩んでいくことをここに誓い、追悼の言葉といたします。



名簿閲覧



参拝者

80年前のトラウマ

渡 美津子

○岡山県津山市での生活

私は現在87歳です。私が生まれた荒牧家は、父・荒牧迹（とまる）、母・ツナヲ、5歳年上の姉・初代、私（美津子）、3歳年下の妹・玲子の5人家族で、当時鉄道局の職員だった父の勤務先である岡山県の津山機関区の宿舎で生活していました。昭和13（1938）年に私が生まれたのもその宿舎で、予定日より早い出産だったため、湯を沸かす時間がなかったため、蒸気機関車で沸いた湯を持ってきたくて、それを産湯として使ったそうです。父は宿舎近くの事務所にいたのですが、私が生まれたことに気が付かなかったそうです。

○父がビルマへ

私が3歳のときに、父は広島に転勤になり、当時日本軍が占領していたビルマ（現在のミャンマー）へ行きました。鉄道線路を引く際に、日本の職人と現地の人との、英語の通訳を務めるためです。そのため、広島市尾長町にある長屋へ引っ越しました。私の両親とともに九州出身で、尾長町には特に親戚や知り合いがいたわけではありません。引っ越し先がなぜ尾長町だったのかは、私は幼かったのでよく分かりません。尾長町では父もおらず、また身の回りのお世話をしてくれる人もいなかったで、母は苦勞したのではないかと思います。持っていた嫁入

り道具、着物などを、戸坂の奥の方へ持っていく、芋や米などの食べ物と交換してもらっていました。戦後、母の嫁入り衣装だけは残っていましたが、他の物は何も残っていませんでした。すべて、食べ物に換えたのでしょうか。

ビルマに行った父は、実際に銃などを持って戦うことこそなかったものの、ジャングルの中を逃げ回るなど、危ない目に遭ったこともあったそうです。

○尾長町での生活

尾長町で、私は尾長国民学校に入学しましたが、空襲を避けるため、近所の大きな家があるところへ分かれて行き、寺子屋のような感じで授業を受けていました。学年の区別はなく、住んでいる地域の近い子どもたちが集まっていました。私が通ったのは、私の家の入っている長屋の西隣にあった、天理教の建物でした。長屋は路地に面していたので、その路地で妹とよく遊んでいました。

近所の家に焼夷弾が落とされ、大穴が開いて全壊したことがあり、「飛行機は人や家をめがけて焼夷弾を落とすのだから、気を付けなさい。飛行機が来たら隠れなさい」とよく言われていました。

○（昭和20年）8月6日

7歳となった私は、その日もいつもどおり天理教の建物の中で授業を受けようとしていました。母は、長屋に住んでいるほかの人たちと一緒に、婦人会で昭和町へ建物疎開に行き、安田高等女学校の1年生だった姉は、学徒動員で中島町に行っていました。

私は、建物内の窓際の席で、祭壇に向

かって座っていたのですが、突然、爆弾が落とされました。光や音は覚えていません。遠いところにいた人は、きのこ雲が見えたのでしょうか、私には何も見えませんでした。何も分かりませんでした。が、とにかく爆弾が落とされたのだということは分かったので、外に出ました。

天理教の建物の中は、家具が倒れて床がガラスだらけになり、塀の赤土と竹が崩れ、バリバリになって倒れていました。とにかくぐちゃぐちゃでした。私の顔（右の頬）にはガラスが刺さり、当時5センチ位切れていて、血が体全体に飛び散っていました。私の靴も、落ちてきた物に埋もれてしまい、裸足で瓦礫の上を歩きました。建物は倒れませんでした。が、床にガラスの破片が飛び散っていたので、足の踏み場がありませんでした。家に帰ってみると、自分の家も同じように、滅茶苦茶になっていました。隣の庭で遊んでいた妹と、一緒に泣きながら路地を歩いて通りに出て、母が帰ってくるのを待っていました。（今の中山峠です）

通りには、大やけどをして男か女かも分からぬ姿の人たちが、皮膚が垂れ下がり、「いたいよー、痛いよー」と手を前に突き出して歩いてきて、ばたばたと死んでいました。皆、街から逃げて来た人たちです。「助けて、助けて、水、水」と言いながら、防火水槽に頭を突っ込んで死んだ人もいました。

夕方、母が帰ってきました。母によると、母が帰って来たとき、私の右頬はガラスで切れて血が出ており、痛みと恐怖で、妹と一緒にぎゃーぎゃーと泣いてい

たそうです。私自身、その時着ていた黄色に黒い水玉模様のワンピースに血が染みて、その後乾いてカリカリになっていたことを覚えています。また、これは最近知ったことですが、妹は外で遊んでいたときに被爆したため、指先をやけどしたそうです。

母は朝、建物疎開に行き、昭和町の柳並木のところで作業前に整列して兵隊さんを待っているときに被爆しました。ピカッと光って、その後気絶したそうです。が、奇跡的にやけどはしていませんでした。一緒に行った他の人たちは皆ひどくやけどをしていたので、母は幸運にも、何かの陰にいたのでしょうか。娘たちのことが気になり、町内会の人たちの弁当を入れていた小車（乳母車）を押して帰って来たのですが、帰ってから見てみると、弁当箱は真っ黒にこげていたそうです。また、帰り道はあちこちから火の手が上がついていたそうです。

大人の人们が、家の裏にある山の間に、大きな蚊帳をつつくれたので、私と妹はその日、そこで過ごしました。同じ蚊帳の中には、被爆してやけどを負って帰って来た近所のおばさんも多くいて、唸りながら横になっていました。母はその夜、市街地から山への延焼を防ぐため、尾長国民学校へ消火活動に行ったので、私は妹と二人になり、震えながら、蚊帳の中から広島市内が燃える様子を一晚中見ていました。

○帰って来ない姉

翌日、7日になっても姉・初代が帰って来ないので、母は市内に捜しに行きま

した。「中島町へ行ったはずだから、とにかくそこへ行ってみる」と言っ出て出かけました。以下は、私が母から聞いた話です。

相生橋から下っていくと、人の死体がゴロゴロと転がっており、川も死体でいっぱいでした。橋を渡ると、鳶口で死体を引上げ集めて焼いている兵隊さんに出会ったので、「このあたりで女学生の遺体を見ていませんか」と尋ねると、「女学生がそこらへんにおるから見てみんさい」と言われました。言われた方を見てみると、男女の区別も前後も分からないほどパンパンに腫れあがった遺体があったので、一人ひとり、ひっくり返して捜しました。その時は、汚い、臭いなど、全く感じませんでした。見た目では分かりませんでした。モンペの紐で、長女を見つけたことができた。ちょうど、紐を新しくしたばかりだったので。

その遺体が長女であることを兵隊さんに伝え、「そこに遺体をよけておくから、明日かめを持っておいで。立派に焼いてやる」と言われました。そのため、その日は仕方がないのでそのまま家へ帰り、9日に、元々味噌を入れていた灰色に紺色の模様の入った、小さな壺をきれいに洗って持っていく、お骨をもらって帰りました。

実は、6日の朝、母は自分が建物疎開に出かけるため、姉に、「勤労動員を休んで留守番をして、妹たちの面倒を見てくれないか」と頼んだそうです。でも姉は、「先生と約束したから、休むわけにはいかん」と言っ出て行きました。姉が

母親の頼みを素直に聞いて留守番をしていたら、死なずに済んだのに、と母は悔やんでいました。

とはいえ、ほとんどの人は骨さえ見つからなかったそうなので、私の姉は骨が見つかっただけ、幸いなのだらうと思います。

○戦後の生活

昭和22(1947)年に、ビルマへ行っていた父が帰ってきました。父は帰国後も鉄道局に勤めたため、一家で大州町の宿舎に引っ越しました。自宅に部下を連れてきて、夜中まで麻雀をしていたことがあり、うるさいなあと思っていました。そんな父ですが、帰国から4年後の昭和26年に、心筋梗塞で亡くなりました。私が12歳のときのことでした。

父が亡くなってからは、母が一家の大黒柱として働き始めました。父の勤め先だった国鉄の関係で世話をしてもらい、南蟹屋にある国鉄の物資部の支店に勤めることになりました。住居についても、父が亡くなってからは大州町の宿舎に住み続けることができなくなったので、しばらくは南蟹屋で暮らしました。しかし、母はその後、「実家が長屋では風が悪くて娘が嫁にいけない」と言い、府中山田に家を建てました。今でも私は、母が建ててくれたこの家で生活しています。

私は比治山小学校を卒業して、段原中学校、皆実高校と進みました。当時、私は保育士になりたいと思っていたのですが、母のお店を手伝わなくてはならなかったため、大学進学は諦めました。

母は、仕事が忙しかったのだと思います

すが、私はあまり、母に優しくしてもらった記憶がありません。父が亡くなった12歳のときから家事をして、家族の食事や母の弁当作り、洗濯などをしていました。洗濯は木でできたらいでするのですが、水が冷たく、冬は手が痛かったことを覚えています。

母の店では、砂糖や醤油、酢、油、麦など、色々なものを扱っていたので、それらを量って販売しました。砂糖は30kgを百目(575g)で量り、醤油は樽で届いたものを量っていました。妹には、母の手伝いはさせず進学させ、妹は歯科衛生士になりました。

昭和42(1967)年、29歳のときにお見合いで出会った人と結婚しました。29歳と言えば、その頃は「行かず後家」と言われる年齢です。それまでもお見合いをたくさんしたのですが、原爆に遭っていることや病気がうつる、父親がいなことなどでなかなか話がまとまりませんでした。原爆症については、「うつる」と何度も言われました。また、九州の人と付き合ったときには、その人の親から、「原爆に遭っている人はだめ。うつたらどうするんだ。変な子が生まれる」と反対されました。被爆した人は長生きができませんと言われたこともあります。

結婚した夫は、原爆には遭っていませんが、私が被爆したことについて、気にしないと云ってくれました。そんな夫との間に、3人の娘を授かりました。

○私のトラウマ

長女を出産するとき、鉄道病院(現在のJRR広島病院)に入院しました。ある

夜、4階の病室の窓から広島市内の方向を見ると、市街地の灯りがまるで燃え盛る炎のように見えて、入院している間中、ずっと眠れませんでした。それ以来、炎が怖くて、ろうそくの火もキャンプファイヤーの火も、とんど祭りのお焚き上げの火も見たくないほどです。

後に、これが「トラウマ」だということを知りました。入院中に街の灯りが炎のように見えたのは、8月6日に蚊帳の中から広島市内が燃え盛る様子を見たときの恐怖心が、トラウマとして私の中に残っているからなのだと分かりました。そしてそのトラウマは、今この歳になっても、消えることはありません。その時に生まれた長女は、何も話していないのに火を怖がるため、私のトラウマが何らかの形で影響しているのかなと思います。

○動員学徒慰霊塔の清掃への参加

私は14年前から、平和記念公園の動員学徒慰霊塔に行くようになり、現在は毎月通い、慰霊塔を清掃したり、花を掛け替えたりしています。元々は母が長く通っていて、毎月6日には朝4、5時に起きて母を送って行っていました。母が行けなくなつてから、私が行くようになりました。やはり、学徒動員で亡くなった姉がかわいそうという気持ちと、さぞ苦しかった事だったと思う気持ちがあります。

最近、背骨の調子が悪く、身体がしんどいように感じることも多いのですが、動員先で亡くなった姉のため、体力の続く限りは動員学徒慰霊塔へ通い続けたいと思っています。

平和朗読劇を観賞して

今年の5月17日に、日本福音ルーテル教会で上演された平和朗読劇「広島第二県女二年西組」原爆で死んだ級友たち」を、当会から関係者30名が観劇しました。その観劇者の中からお寄せいただいた感想文です。

*平和朗読劇「広島第二県女二年西組」原爆で死んだ級友たち」

この朗読劇の原作者である「関千枝子」氏の著書「広島第二県女二年西組」原爆で死んだ級友たち」を基に制作された朗読劇です。

原作者が10年かけて記録した、級友たちの原爆投下時の模様と、生存者及び遺族の戦後が語られています。

関氏の活動に感銘し、「原爆による動員学徒被害の具体的な事実を一人でも多くの人々に知ってもらうために伝えていきたい」との思いで集まった「+Doの会」のメンバー11人が、迫真の演技を披露してくださいました。

朗読劇というものを初めて観劇しました。

最初は、映像や大音響の擬音にビックリ驚かされましたが、上演が進むうちに、演じる方々の迫真の演技に引き込まれ、被爆直後の悲惨な状況下に自分もおかれている感覚になりました。

変わり果てた瀕死の容態の娘の前に、涙が止まらない母親に対して、「おかあちゃん、泣いちゃあいけん。うちらはこまい兵隊じゃ。兵隊がお国のために死ぬ

のに、泣いちゃあいけん。うちが死ぬのも名譽の戦死じゃ。」と娘が励ますシーンでは、13歳の健気な少女にこのように言わしめるその時代の世情に、哀しみを通り越して怒りを覚えました。

また、劇の最後に、「日本教育史上最大の被害である、建物疎開作業の「惨事」を、あまりに多くの人々が知らない。広島の人々でさえ事実を知らないことに、驚きを通り越して怒りを感じています。平和大通り」は、動員された少年少女たちの墓場だったということ、改めて記憶されるようにと願っています。」と、原作者の関千枝子さんが語るシーンでは、子供や孫たちに原爆の実相を伝えていない広島人の一人として、申し訳なく深く反省させられました。

今回の平和朗読劇は、戦争と原爆の悲惨な実相を伝え残す大変貴重な手段であると確信しました。

毎年定期的に上演していただきたいものです。

他人が体験したことや話したことを自分のこととして語る朗読劇を観ました。

残された家族の気持ちもしつかり伝わり、こういう伝え方もあると知りました。しかも、被爆の題材なのに広島では無く大阪の人が出演し驚き有難く不思議な感覚でした。

被爆後三十年たつて級友の遺族を訪ねて本にして残した作者の使命感を強く感じました。

被爆後八十年、当時を知る人が高齢となり伝え続けるのがむずかしくなっています。

伝える手段の一つとして心の拠り処として建立した慰霊塔を残していく必要性を痛感しました。

また、動員学徒による建物疎開作業のお蔭で開通した平和大通りを通る時は多くの人の無念・悲しみを忘れず感謝して通ろうと思います。

去る5月17日、日本福音ルーテル広島教会で開催された広島第二県女二組西組39名の原爆犠牲性を描く朗読劇を観劇しました。私は朗読劇の観劇は初めてのことでした。原爆死した女子生徒の映像や音や音楽も加わり、臨場感のある構成になっており、感激しました。

我が広島県動員学徒等犠牲者の会の現理事長の本地正治さんの叔母に当たる本地文枝さん、そして評議員の村興久美子さんの叔母に当たる石川清子さんが、当時広島第二県女二組西組の生徒として在籍しておられ、あの日動員学徒として友と共に広島市内の中心地雑魚場町の建物疎開作業中に被爆死されたことを今回の朗読劇で初めて知りました。

あの日のお二人のけなげにも壮絶な生きざまがリアルに生々しく取り上げてあって、被爆の惨状をより身近に感じました。市内中心地雑魚場町の建物疎開作業には、県立広島商業高校の生徒たちも参加しており、実は私の兄は当時4年生、137名の友と共に被爆死しました。兄の場合は情報が全く分からず行方不明状態のままとなっています。

妻も以前朗読劇を観劇したことがありました。というのも、妻の兄は当時広島二

中の一年生、動員学徒として市内中島町の建物疎開作業に従事していて被爆、水泳が得意だったこともあってか川を渡り江波の実家まで帰ってきたけど、翌朝亡くなりました。そのことを妻の父が書いた手記が被爆死した広島二中の生徒たち351名の一人として「いしぶみ」に掲載され、手記「いしぶみ」をもとに朗読劇が行われました。妻はその朗読劇で兄のことが取り上げられたことに感動したと言っていました。

今回の朗読劇の観劇は、私と妻の個人的なこと（共に兄が動員学徒として建物疎開作業中に被爆死したこと）の記憶を思い起こす契機にもなりました。

今や終戦から80年経ち、「建物疎開」という言葉は、死語になったかもしれせん。それだけに動員学徒生の大半が建物疎開作業に従事していて被爆死したことを、しっかりと語り継いでゆかなければと痛感した次第です。

原爆悲劇の実態を一人か二人で語る朗読は何度かお聞きしたことがありますが、11人の朗読劇だったでしょうか、原爆被害の実態を良くあらわした朗読劇でした。特に原爆投下後の市民の惨状は、無言のまま歩き回る状況で表現する工夫であつたが、このような朗読劇で訴える方法も良く、工夫された朗読劇であつたと思いました。

8月6日、動員学徒に従事した級友たちは全滅しました。当日、腹痛のため欠席して死をまぬがれた著者が、40年後に、一人一人の遺族や関係者を訪ねあるき、突然に逝ったクラス全員それぞれの足跡をたどりながら、彼女らの生を鮮やかに切り

取り、原爆の犠牲になった女学生と遺族を追った、素晴らしい作品でした。

・・・・・・・・・・・・・・・・

関さんの同級生の森沢妙子さんのお父さん、森沢雄三さんが浜井市長の下で助役を務め、平和都市建設のため、中央とのパイプ役を果たされたことを知りました。草津のカキ養殖を行う水産業界のボスで、地元の有力者であつたお父さんが、早朝暗いうちに井口まで海岸を歩いてゆき、原爆で亡くした二人の娘の名を呼んで泣いていたんですね。坂本節子さんは作業に従事してただ一人、最後まで生き残った方ですが、教師になって、結婚もして、二人のお子さんにも恵まれて、けれども30代の若さで亡くなりました。戦争の時代に勉強ができなかった残念な思いから、自分の生徒さんたちに「勉強なさい」とよく言っておられたとのこと。みなさんのお話にどれも心打たれます。関さんから「靖国」の問題について、一人一人が考えるように提起されています。自分としてはどうしても受け入れられないものがあるのだけれども、他の人の気持ちもよくわかるのです。家族を思う気持ちは同じですから。そこを共通の目的の出発点にしましょうと述べておられると思います。

・・・・・・・・・・・・・・・・

原爆が落とされたあとの惨禍を聞いたあと、いつも思うのですが、そこには一人一人の死、苦しみがあつたということです。それを今回も感じました。十把一絡げに語られるのではなく、一人一人の生があり死があつたのだと。

世界で今この時も戦争が起こっており

続けられています。それをテレビでみて、今日は何人の人が死んだと報じられているけれど、数ではないのです。一人一人なのです。

関さんは、亡くなられた級友の足跡をたどられた。それは苦しく辛いことであつたと思うけど、そのおかげで私達は一人一人の体験を知ることができた。そう思います。また、それを今回朗読劇として観て、より思いがわかりました。朗読劇ということで地味ではあつたけれど、写真、音響なども加わり思いが伝わってきました。戦争、原爆を知らない世代にとつて、このような劇を観ることは貴重な体験だと思いました。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「平和大通りは少年・少女の墓場だつた」非常に重く胸が締めつけられる表現です。

平和大通りは、その名前の通り平和の願いを込めて作られた通りです。が、実際には多くの少年・少女が命を落とした場所であつたことを知りました。

五月一七日、「広島第二県女二年西組」を鑑賞しました。

原爆投下前の広島の前で、戦争という特殊な日々の中でもごく普通に生活する女学生たちの姿がありました。

彼女たちの日常は希望に満ち溢れていて、屈託のない笑顔は八月六日の悲劇をより一層、際立たせていました。劇中、彼女たち一人一人の写真が示されました。みんな「おかっぱ頭」でした。

「この人たちが原爆に遭うことがなければ、どの様な人生を過ごされたのだろ

う」胸が締めつけられました。

「うちらはこまい兵隊じゃ。死ぬのは名誉なんじゃ」衝撃でした。死ぬことへの名譽感をわずかに十三歳で言える戦争の残酷さを憎まずにはいられませんでした。

彼女たちがどんなに生き生きとした少女たちだったか、劇中では本当によく描かれていました。

彼女たちの毎日は、きつと笑い声と希望に満ち溢れていました。学徒動員で作業に行く朝も「国のため」と出かけたはずです。その時にも未来を信じ、希望を抱いていたはずですが、一瞬にして原爆は全てを奪い去りました。

生き残った人の苦しみ、絶望はどれほどだったでしょう。「私だけが生き残ってすまない」。生き残った関さんの無念さ、罪悪感は十三歳が背負うには、あまりに大き過ぎたはずですが、どんなに深い悲しみだったことでしょう。

「戦争は他人事ではない。今、現在にこの教訓を生かさなければいけない」と彼女たちは教えてくれています。

「戦争しか知らない世代」から「戦争を知らない世代」に送られた強いメッセージと宿題である。と感じました。

戦争の悲惨さ、平和の尊さは、広島に生まれ、育ち、分かっているつもりでしたがこの「広島第二県女二年西組」を鑑賞し、改めて認識しました。

この出来事を決して風美化させてはいけません。私たちから、次の世代へ、未来永劫、語り継いでいくことの重要さを痛感しました。今、私たちの問題として受け止め、伝えていくことです。

ご寄付お礼

令和7年6月から令和7年8月までに、次の皆様から貴重なご寄付をいただきました。ご厚志、誠にありがとうございます。

桑原キヨコ様	志水 清様
能美 直哉様	奥野 静子様
上田 照子様	佐藤 恵子様
榎寄 通子様	西村 晴夫様
仲 庫生様	河野由久夫様

ご寄付いただく際には、左記の口座へお振り込みください。

ゆうちょ銀行

振替口座 013000618858

一般財団法人 広島県動員学徒等犠牲者の会

あとがき

被爆八十年の今年、会員の皆様はどんな一年を過ごされたでしょう。

私は、免許更新とより良く見えるために白内障手術をしました。不安と恐怖が取れないままだったけど痛くなかった。次の日に眼帯を外してもらった時の感激・喜びは忘れられない。明るく鮮やかに見え、気持ちも頭もはつきりし、幸福感が増した。昔から二眼二足と言われているけど医学の力に感謝するばかりでした。今年は歩ける喜びも体験しました。バイクで転倒し、心配してくれた人がバイクを起こしてくれた。医学より人の力に助けられた。お礼を言つて立ち上がり家まで乗って帰った。後日歩けなくなり脳からと診断され、入院手術し家族と病院のお陰で回復しました。これからも目と足を大切に、悔いのない毎日を送りたい。(谷口)